

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男



仮設住宅引っ越しボランティア作業、協力したい願いを実現させることも大切だ。

新年を迎えた。人の知恵は素晴らしいといつも思う。区切りあるように、新たな思いをほめてくれる。この事を締めくくる。この繰り返しが知的な人間へと成長させたのだらう。

しかし、昨年発生した長野県神城断層地震が引き起こした状況

は、全く先の見通せない事態だ。一瞬の出来事が、当たり前の生活に激変を及ぼした。また、広範囲に及ぶ大きな被害、災害の全容さえ未確認だ。「震地も異常な状況、水路が使用できるかも解せず、田植え用の苗の予約もできない」「住み慣れた土地には、大きな亀裂が走り、予断を許さない」

## 起きた事実を住民の視点で書き残す 事が大切だと考えてみませんか

なにも二次災害を危惧する音も聞かなくて。震災対策で、手一杯だかまを判断せずに、この困難な状況に、直面した関係者が、「今何に取り組まなければ」と書き残すことが大切だ。この地域の重要性を認識すべきだ。最優先すべきは、人を中心

考えることは当たり前だが、それと並行して災害時に雇われた事態を住民の視点で正確に書き残すこと。地震発生時に、被災現場で起きたことはなんだったのか。行政関係者は、どの様な状況だったか。災害対策本部が、立ち上がるまで、どの様な過程が

あったのか。災害発生時に、住民はどの様な行動を成せたのか。災害対応がどの様に繰り返されたのか。記憶は、時間の経過と共に不明朗になりがちだ。過ぎ去った時間の中で、隠して抱きたいことも多いだろう。しかし、幸いにも一人の死亡者もなかった事実の

中へ、これからの災害対応時に準備すべき多岐にわたる。防災訓練を、公にする意義が求められているのを認識してほしい。「しなのまき野」が発行した、家康断層の編纂「長野県の地震入門」から、日本の国土面積は、世界の1%にも満たないのに、

くはる多くの断層を示している。これらの情報から推測しても、今後多くの地域で、地震による災害を受けるとは違いない。その人達のために、正確な情報は必要なのだ。年末に、長野県が用意した被災者の仮設住宅が完成し、引っ越しのためにボランティア

の要請が、白馬村社会福祉協議会から連絡があった。早速、白馬村、白馬村と長野県災害社会開発センター、白馬グループに協力を依頼する。奥地日まの3日しかない中、快く協力いただいた。そして、多くのメンバーから「連絡してもらって、ありがた

う」の言葉。多くの人が、何か力になりたいと願っている。被災者をより知っているから、被災者全体を対象にしたボランティアに、個人的な立場で、参加できない心情も理解できる。団体やグループだから、参加しやすいのだろう。当然、村の中の事、知り合いも多い。大変だったな、何か困ったことはないかな、などの会話が聞か

れる。「震災直後、家の中に閉じこめられた時、近所の皆さんが声を掛けてくれて本当に有難かった。」「十数年前にも被災、今回で二度目、今更に住んでいないが、村内には住みたい」と話してくれる内容に、心がしめつけられる。被災者の心の

中に抱えた想いを、この様に聞き、心のケアができるのか、早急な対応を願っています。仮設住宅は、1か月をかけたに建てたとほ関わらない内容だ。栄村での仮設住宅の工事経験から、多くを改良した内容だ。しかし、仮設住宅の入居は、取り急ぎの対応だ。早く被災者入居を前倒して、村営住宅を1か所に整備する方針を明確にして、被災者に希望を持たせたいとの話も

現場で聞く事ができた。総論も大切だが、被災者に与える具体策が求められていることも事実だ。確かにスピード感が必要な時だ。被災者の将来への負担感を排除する知恵はあるはずだ。対策が後追いすることで、生じる費用を最小限に

して被災者のために、有意義な事業展開をしてほしいと、心から願っている。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村長上)